



右/所員のみなさんと。忽滑谷の右隣が山岸所長。
左/サッシ会社の担当者との打合わせにも参加する。



私の
仲間
komachi's
point

「近所の道路工事とか、自宅の増築や車庫を建設する現場を見て『おもしろいな、どうやってできるんだろう』と、興味を持っていました」

現場で働く方法はさまざま。警備員、職人、現場監督と、その職種は多様にある。ゼネコン（総合建設業）が担う施工管理にはまれに文系出身者もいるが、理系を専攻した者がほとんどだ。

普通科高校に進学した忽滑谷は、得意な理系を選択。

「担任の先生から『理系だよな』と念押しされるくらい、文系科目が苦手だったんです（笑）。大学の学科は、将来ご飯が食べていけるのはどこだろうという基準で選びました」

なんとも現実的な考えで建築学科を専攻した忽滑谷は、「建物はどうやってできるの?」という幼少期の疑問を解決する一歩を踏み出した。

生まれ。幼少期から建設業に興味を示していた。山好きの父が休みの日には家族を山に連れていくことも多く、道すがらダムに立ち寄ると、そのスケールの大きさに『ダムってカッコいい』と目を輝かせるような少女だった。ものづくりの現場を見ることも好きで、食い入るように観察した。

忽滑谷佳世は一九九一年（平成三年）、埼玉県生まれ。幼少期から建設業に興味を示していた。山好きの父が休みの日には家族を山に連れていくことも多く、道すがらダムに立ち寄ると、そのスケールの大きさに『ダムってカッコいい』と目を輝かせるような少女だった。ものづくりの現場を見ることも好きで、食い入るように観察した。

「大学の別のキャンパスで校舎の新築工事をしていました。講義でその現場を数回見学して、はじめて施工管理という職種を知りました。設計に進むとばかり思っていたので、興味津々でしたね」

将来、建設業界で働くにあたり、職種に悩んでいた忽滑谷は、現場見学会をきっかけに施工管理の情報収集に勤しみ、ハウスメーカーかゼネコンという選択肢に行きついた。

「一般の方を相手に一人で何軒も担当するハウスメーカーと、事業主を相手に一つの現場に深く携わるゼネコンというイメージを持ったので、性格的に後者を選びました」

その後、就職活動課に掛け合い、再びゼネコンの現場を見学することになる。

「それが西松建設株の現場だったんです。女性がいる現場で、その方の考えや業務内容、就業環境を教えていただき、具体的に就業をイメージするよい機会になりました。『一緒に頑張ろう』と言ってもらえたのも心強かったです」

女性の先輩社員からの生の声も後押しし、建物を一番間近で見られる施工管理の道へ進むことを決意した。

建物はどうやってできるの?!

設計ではなく施工管理という仕事

輝け!

けんせつ小町

現場監督

ぬかりや
忽滑谷佳世

西松建設株
日吉五丁目計画新築工事



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

神奈川県横浜市の郊外。学生たちで賑わう日吉駅前から少し離れた大学の国際学生寮の現場に今号の主役はいる。多くの男性職員、職人のなかでも物怖じせず、常に明るく振舞う姿。同じ目的を持った仲間たちの一員として前向きに施工管理に当たる若き現場監督を取材した。





窓まわりには、溶接せずにアルミサッシを固定する工法を用いている。火気の発生がないため、より安全に工事を進められる。「忽滑谷さんはわれわれの司令塔です」とサッシの職人も顔をほころばせた。

「職人さんに 真摯に向き合えば、 信頼関係は築ける」

私の
現場
komachi's
point



上/現場全景。国際学生寮としてのオープンは来年の3月だ。
下/図面を読み、仕上げに必要な寸法を入れる。

職人との信頼関係を築く

女性活躍への熱意を感じ、西松建設(株)に入社。研修を終えた七月に、当時同社が注力していた都心のオフィスビルの現場に配属された。女性だからという特別扱いはなく、工事の記録写真の撮影やコンクリートの打設など、新人が担当する仕事を男性と同じように任された。

「ただ、一年目とてかく右も左もわからない状態でしたから、それはたいへんでした」
コンクリート打設の時は土工と大工の職人に、内装工事が始まれば仕上げの職人に知恵を借り、自分の知識として吸収していった。なんとなく

わかった気になって現場を進めてしまえば、後々になって問題が出てくる可能性もある。

「後戻りはできないですし、一緒に働く職人さんにも申し訳ないことになるので。恥を捨てて先輩や職人さんになんでも聞きました」
そんな忽滑谷の仕事に対する姿勢を、毎日見ている人たちがいた。

「『がんばっているね』と職人さんたちが声を掛けてくださったんです。今日一日を乗り切ろうと必死だったなか、見守ってくれて評価してもらえたことを嬉しく思いました」

その現場では「職人さんに真摯に向き合いなさい」と繰り返し教えられた。忽滑谷はその教えを実践し続けている。

「職人さんはその職種のプロフェッショナルなんです。私は到底かなわない。真摯に向き合わないと、指示もまじめに聞いてくれませんし、自分のことも信頼してくれませんか」

いまでも当時一緒に仕事をした職人に連絡を取り、わからないことを相談することもあるという。三年目になり、そんな信頼関係を少しずつ築き始めている。

これからのキャリアの積み方

社内のローテーション制度で三カ月の内勤業務を経験し、図面の読解力を鍛えた忽滑谷は、今年四月から日吉五丁目計画新築工事で現場監督を務めている。

komachi MEMO

「学生時代は写真部に入っていました。写真を撮ることは好きなんですけど、自分が取材を受けて写真を撮られる側になるなんて思いもしませんでした。撮られるのって恥ずかしいですね(笑)」



profile

ぬかりや・かよ◎1991(平成3)年、埼玉県生まれ。建築学科を卒業後、2014年4月に西松建設(株)入社。都心のオフィスビルの建設に従事し、現在は国際学生寮の現場で活躍している。

鳶、型枠、鉄筋の職長と。1年目に配属された現場からの付き合いの職長とは困ったことをなんでも相談できる仲だ。

職人とあれこれ知恵を出し合い、一緒にものづくりができることが現場の魅力だと忽滑谷は話す。その達成感を味わうためにも、現場で働き続けるにはどうステップアップしたらよいかを考えている。現場で働くには、実際のところ体力も欠かせない。主任クラスになるまで、今と同じ働き方ができるのか、不安もあるという。「これで二現場目になりますが、自分が一番年下なので前の現場と同じ工種を担当するのだろうか」と思っていたんです」

ところが現場の所長、副所長も忽滑谷の不安を察し、忽滑谷をはじめ所員全員がステップアップできる工夫をしてくれた。

「だいたい担当工種を付けるのですが、今回は工区(エリア)で分けてくださったんです。いくつもの工種を一人でやらないといけないのでたいへんなところもありますが、早く先輩に追いつけるように精進したいです」

西松建設(株)では現在六二名の女性総合職が活躍している。女性が安心して活躍できる職場づくりは、男女問わず「みんな」が働きやすい職場づくりとして、全社を挙げて就労環境の改善に取り組んでいる。

「会社も本気になって考えてくれているので、安心して入職してほしい。一緒に自分にあった働き方を見つけ出しましょう」

と笑顔を見せた。忽滑谷流の働き方を見つけ、現場で活躍し続ける姿が目に見えかんだ。